女子寮の管理人だと！？

荒音　琴羽

注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

ある高校に１人の男が就職してきた

その男の仕事とは

「女子寮の管理人だと!?」

目　次

再び母校へ　そしたらまさかの!?　1
先輩の正体　5

再び母校へ　そしたらまさかの!?

四月始めのよく晴れた日の夕方に、私立星琉高校の駐車場に一台のチューニングカーが入ってきた。

その音に気付き、部活動に勤しんでいた生徒も動きを止め、音の発生源の方に顔を向ける。

エンジンの火が切られると、ドアを開けて若い男が降りてくる。

そして、入口から校舎に入り職員室に声をかけると、理事長室に向かう。

部屋の前に来ると扉をノックする。

「どうぞ」

「失礼します」

中から返事が聞こえ、若い男が扉を開けると、中には一人の男がいた。

「お久しぶりです、理事長」

「よぉ！元気してたか？」

若い男に理事長と呼ばれた男は、星琉高校の理事長をしている松原喜代志（まつばらきよし）である。

「元気ではあったんですけどね、まさか二年しないで会社が潰れるとは思わなかったですよ」
「だろうな、だからウチで雇ってあげようって思ってね、ちょうど人が欲しかったから」
「それが凄くありがたいです、それで俺の仕事って何なんですか?」
　若い男の名前は宮原剣介（みやはらけんすけ）、二年前に星琉高校を卒業して企業に就職したが、その会社が去年の秋に倒産して再就職先を探していた所に理事長から声がかかったので現在こうして学校に来ている。
「去年完成した寮の管理人をしてほしい」
「寮ですか、了解です」
「ちなみに地下駐車場には、リフトとかがあるからな、お前にとってはいい環境だろ?」
　その言葉を聞いた瞬間に剣介の表情が一気に明るくなる。
「めちゃくちゃ良いです!ありがとうございます」
「まあ、そのせいでお前の在学中は迷惑かけられたけどな」
「その事はすみませんでした」
　苦笑いしつつ剣介は頭を下げる。
「まあ、授業態度や生徒とかからの人気はめちゃくちゃ良かったけどな、教師よりもお前の言うことを聞いてたからな」

「だからこうして呼び戻したんだ、仕返しとしてね、ということでここに向かってくれ」
そう言って理事長は不敵な笑みを浮かべながら寮までの地図を渡す。
「仕返しなんてやめてくださいよ～」
「まぁ、出来た時から管理人をやってる子もいるから、詳しくはその子に聞いてくれ」
「話変えましたね、まあいいです行ってきます」
そう言って理事長室を出ていき、駐車場に向かう。
駐車場に着くと車の周りに数人の生徒が集まっていた。
「ごめんね～、ちょっとどいてくれるかな」
そう言って車に乗り込もうとした時に、一人の男子生徒が声をかけてきた。
「すみません、『黒い魔王』さんですよね？」
「ごめん、人違いだよ」
そう言ってドアを閉め、シートベルトを締める。
（高校生も俺の通り名を知ってるとはな、驚いた）
そう思いながらエンジンに火を入れて駐車場を出て行く。
そして地図通りに走ると真新しい茶色い壁の建物があった。
その出入り口の前に車を止め、入口の前に立つ。
「ここが俺の新しい職場か、『星琉高校女子寮』」

そう言って看板に書かれた文字を読んでドアに手をかけようとする。
（女子寮?）
そう思い、数歩下がって入口の上にある看板を再び見る
『星琉高校女子寮』
看板にはハッキリとそう書かれていた。
「俺が女子寮の管理人だと!?」

先輩の正体

剣介はすぐにスマホを取りだし、理事長に連絡する。
『・・・お掛けになった電話は、電波の届かない所にあるか、電源が入っていないため、掛かりません』
「アイツ電源切ってやがる!」
ハァ、とため息をつき、意を決して扉に手をかける。
「こんにちは～」
返事がないので事務室の中を見るが、
「・・・誰もいないか」
(地下駐車場があるって言ってたな、車置いてくるか)
そう思い、寮の前に止めたままだった車に戻り、地下駐車場へ車を進ませる。
中には十台ほどの駐車スペースとリフトが二台、奥には工具などが置かれている。
そして今、一台の車がリフトアップされていた。
(あの車、アイツじゃないか?)
そう思いながら駐車スペースに車を止めて降りる。

その時、肩よりも少し長くのばした茶色い髪を後ろで縛っている少女が、車の下で作業していたらしく出てきた。
「あっ!!」
「森の白乙女!」
「黒い魔王!」
お互いに目が合った瞬間に驚き、言葉を発する。
[森の白乙女]とは、女が駆る車体とウィングを純正色の白で塗装されたＳ１５シルビアの二つ名である。
[黒い魔王]とは、剣介の駆る車体・ホイール・ウィングを艶消しの黒に塗装されたＧＤＢ最終型のフェイスを２２Ｂに移植したＳＴＩの二つ名である。
「何でお前がこんな所に?」
「何でって、ここは僕の仕事場だから」
「・・・は?」
女の言ったことに剣介は思わず開いた口が閉じない状態になる。
「ちょっと待て、もしかしてお前がここの管理人か?」
「そうだけど、なんで?」
あからさまに不機嫌そうに言った女に対し、剣介は頭を抱える。

「俺、今日からお前の後輩だわ」
「・・・え?」
今度は女が唖然とする。
「バカじゃない?僕とお前は犬猿の仲って言われてるんだぞ!それなのに仲良く仕事なんて出来やしない」
[森の白乙女]と[黒い魔王]はバトルをしても休憩中でも喧嘩腰で仲が悪いことで有名である。
「一個言っておくが、俺はお前の事を嫌いだとは思っていない、一方的にお前が牙を剥いてくるんじゃないか」
「僕はただ、お前が勘違いしてる事が気に食わないだけだ」
「何を勘違いしてるんだよ、お前は二つ名を持つ走り屋の女じゃないのか?」
剣介が首をかしげながら聞くが、その問いに女の怒りは頂点に達したようだ。
「一つ間違いだよ!僕は男だ!女じゃない!なんでみんな間違えるんだよ!」
「それは見た目が「女に見えるからだろ!みんなが言うよ!」
「・・・え?お前男なのか?」
ワンテンポ遅れて剣介の思考が驚きという感情を弾き出す。
「そうだよ、瑪瑙芽(めのうめい)正真正銘の男だよ!」